PA-6　中国語の「喝醉」構文の構造的多義性と逆行束縛

岳昱澎・小川芳樹
（東北大学大学院情報科学研究科）
yue.yupeng.q2@dc.tohoku.ac.jp / yoshiki.ogawa.e3@tohoku.ac.jp

要旨：中国語では、V-V 複合が起きると、他動詞構文の解釈可能性が大幅に高まる場合がある。この事実に対しては、中国語の語彙意味論、統語論の研究者によってさまざまに異なる分析が試みられてきた（Li (1990, 1995, 1999), Huang (2010), 于（2015))。本発表では、先行研究での分析にはいずれも問題があることを、「喝 (drink)」「醉（get drunk)」という 2 つの動詞を組み合わせてできる他動詞構文が示す逆行束縛の現象など 7 つの特性をもとに立証し、当該現象に対して、統語論に基づく新たな分析を提案する。その際、対象項(Theme)を目的語とする複合動詞「喝醉(drink-drunk)」は経験者主語型心理動詞と同様、行為動詞であって、軽動詞 v(DP)をもつが、対象項を主語とする「喝醉」は経験者目的語型心理動詞と同様、使役動詞であって、軽動詞 v(CAUSE)をもつと論じる(cf. Folli and Harley (2007))。

キーワード：複合動詞、行為動詞・使役動詞、逆行束縛、軽動詞、中国語

1. 導入

以下、(1)や(3a,b)のような構文は「複合動詞構文」と呼び、中でも、(1a,b)や(3a)のタイプは行為者主語文、(1c)や(3b)のタイプは使役者主語文と呼ぶ。(3a,b)に特化する場合は「喝醉(drink-drunk)」構文と呼ぶ。(2)は、複合を含まない単独動詞の事例である。

(1)　太郎　追　累　了　次郎.
　　Taro　chase-tired Asp　Jiro
　a. 太郎が次郎を追いかけ、次郎が疲れた。
　b. 太郎が次郎を追いかけ、太郎が疲れた。
　c. 次郎が太郎を追いかけ、次郎が疲れた。
　d.*次郎が太郎を追いかけ、太郎が疲れた。　(cf. Li (1995: 255-257))

(2)　太郎　追　了　次郎　一个小时.
　　Taro　chase Asp　Jiro　one hour
　（太郎は次郎を 1 時間追いかけた／*次郎が太郎を 1 時間追いかけた）

(3) a. 太郎 喝　醉　了 酒.
　　Taro drink drunk Asp sake
　　'Taro drank sake and got drunk.'
　b. 酒　喝　醉　了　太郎.
　　Sake drink drunk Asp Taro
　　'Taro drank sake and got drunk.'

(1)と(3)のような複合動詞の場合にのみ、行為者と対象の入れ替えが可能である。

本発表では、(3a,b)の事実を含む「喝醉(drink-drunk)」構文の 7 点の特徴について 2 節で記述し、その 7 点について、3 節と 4 節で、他動詞の複合動詞を構成する動詞句の中の軽動詞（light verb）の形式素性の区別に基づく統語論的な説明を与えることを目的とする。

2. 「喝醉（drink-drunk)」構文の諸特徴

[A] (3a)は、英語の結果構文に働く「直接目的語制約（Direct Object Restriction）」(Simpson

(1983))が働かず、主語の結果状態を表せる（Li (1990, 1995, 1999); Huang (2010))。

(4) a.*Taro drank wine drunk(en).（結果構文としては非文）
b. The hunter shouted *(himself) hoarse.

[B] S-V1-V2-Asp-O の基本語順を保ったまま、行為者項＝経験者項を主語にすることもでき、主題項＝使役者項を主語にすることもできる（cf. Li (1999: 449)) (= (3a,b))。

この特性は、「喝醉」以外にも、以下の例を含めて、少なくとも 90 以上の中国語の複合動詞で成り立つだけでなく、V2 が「V1 が表す行為をした結果生じた身体・精神の状態」を表す点で共通するので、語彙的例外ではなく、ある種の心理動詞構文を形成していると言える。

[C] 行為者主語文の(3a)では再帰代名詞「自己」の順行束縛ができず、使役者主語文の(3b)では逆行束縛が可能である（cf. (Belletti & Rizzi (1988), Pesetsky (1995)) (= (4a,b))。

(5) a.* 太郎$_i$ 喝 醉 了 [自己]$_i$的 酒.
Taro drink drunk Asp self of sake
'Taro drank his own sake and got drunk.'
b. [自己]$_i$的 酒 喝 醉 了 太郎$_i$.
self of sake drink drunk Asp Taro
'Taro drank his own sake and got drunk.'

(6) a. [自己]$_i$ 的 衣服 洗 累 了 太郎$_i$.
self DE clothes wash tired Asp Taro
'Washing his own clothes makes Taro feel tired.'
b. [自己]$_i$ 播放的 英文 歌曲 听 困 了 太郎$_i$.
self play DE English songs listen sleepy Asp Taro
'Listening to English songs played by himself makes Taro feel sleepy.'
c. [自己]$_i$ 的 故事 讲 烦 了 太郎$_i$.
self DE story tell fed up Asp Taro
'Telling the story of himself makes Taro feel tired.'

[D] (3a)の「酒」は不定でなければならないが、(3b)の「酒」は定でなければならない。

(7) a. *太郎 喝 醉 了 这 瓶 酒.
Taro drink drunk Asp this bottle sake
'Taro drank this bottle of sake and got drunk.'
b. 这 瓶 酒 喝 醉 了 太郎
this bottle sake drink drunk Asp Taro
'Taro drank this bottle of sake and got drunk.'

[E] (3b)では主語と動詞の間に BA（把）を置くことで目的語を前置することができるが、(3a)ではこれができない。

(8) a. *太郎 把 酒 喝 醉 了.
Taro BA sake drink drunk Asp
b. 酒 把 太郎 喝 醉 了.
Sake BA Taro drink drunk Asp
'Taro drank this bottle of sake and got drunk.'

[F] (3a)の「喝醉」は「用碗（カップを用いて)」のような道具句や「在院子里（庭で)」のような場所句で修飾できるが、(3b)ではこれができない。

(9)　a. 太郎 {用　碗 / 在院子里} 喝　醉　了　酒.
Taro with cup　garden-in drink drunk Asp sake
'Taro drank sake {with a cup / in the garden} and got drunk.'
b. *酒　{用　碗 / 在院子里}　喝　醉　了　太郎.
Sake with cup　garden-in　drink drunk Asp Taro

[G] 行為者主語文の(3a)では、verb copying (doubling / reduplication)ができるが、使役者主語文の(3b)では verb copying は許されない。

(10)　a. 太郎 喝　酒　喝　醉　了.
Taro drink sake drink drunk　Asp
'Taro drank sake and got drunk.'
b. *酒　喝　太郎 喝　醉　了.
Sake drink Taro drink drunk Asp

日本語では、「V1+疲れる／慣れる／飽きる」では主語と目的語の入れ替えは不可能だが、経験者目的語型(EO)心理動詞や、それを含む使役動詞の構文においては、接尾辞「させる」などで自動詞を使役化することで、主語と目的語が入れ替え可能なものがある。

(11)　a. 太郎は本を読み疲れた。
b. *本が太郎を読み疲れ（させ）た。
(12)　a. 太郎は花子の些細な一言に**怒った**。
b. [太郎]$_i$の研究は、[自分]$_i$の論文が国際ジャーナルに掲載されたことで**勢いづいた**。
c. [自分]$_i$の毎日の生活を記録した日記をつけることで[太郎]$_i$は大きく**成長した。**
(13)　a. 花子の些細な一言が太郎を**怒らせた**。
b. [自分]$_i$の論文が国際ジャーナルに掲載されたことが[太郎]$_i$の研究を**勢いづけた**。
c. [自分]$_i$の毎日の生活を記録した日記をつけることが[太郎]$_i$を**成長させた。**

[A]～[G]の事実のうちの[C], [D], [F], [G]は、Li (1995, 1999), Huang (2010), 于 (2015)のいずれの枠組みでも説明できない。一方、本発表では、中国語の「喝醉」構文についての[A]～[G]の特徴は、複合動詞「喝醉」が、軽動詞 v(DO)を伴う行為者主語文にも、軽動詞 v(CAUSE)を伴う使役者主語文にも生起できることの帰結であると主張する。

3. 「喝醉」構文における逆行束縛の説明

3.1. 現代中国語の使役起動交替

古漢語（先秦時代）には状態動詞の使役的な用法が存在したが（=(14))、現代中国語では、非対格動詞を他動詞化する際には、行為を表す V1 と結果を表す V2 を複合する（=(15))(望月（2004))。

(14)　a. 破敌 - 敌破
defeat the enemy – The enemy was defeated.
b. 空其城-城空
empty the city – The city became empty.
(15)　a. 他 打破了花瓶 - 花瓶 破了
He broke the vase. - The vase broke.
b. 他 喝空了水杯 - 水杯 空了
He emptied the glass. – The glass became empty.

(16)~(18)の他動詞では結果動詞の前に「打(hit)」「弄(play)」「逗（tease)」が付加している。これらは、単独ではそれぞれ括弧内に示す意味をもつが、複合動詞の前項としては、もはや、その本来の意味を持たず、他動詞化接辞に文法化している。本発表では、「打」「弄」「逗」は、以下の構造における軽動詞（light verb; v)主要部を占めると仮定する。

(16)　太郎 打 破　了　{惯例 ／ 界限}.
Taro hit-break Asp　practice ／ limit
'Taro broke away from his/our practice.' ／ 'Taro pushed beyond his limit.'

(17)　a. 车库门　开　了.　／ b.　太郎　弄 开　了　车库门
Garage door open Asp　Taro　play open Asp garage door
'The garade door opened.'／ 'Taro opened the garage door.'

(18)　a. 太郎　乐　了.　／b.　这个 消息　逗　乐　了　太郎.
Taro　amuse Asp　This　news　tease　amuse Asp Taro
'Taro amused himself.' ／'This news amused Taro.'

(19)　[$_{vP}$ NP(Agent) [$_{v'}$ v（弄）[$_{VP}$ V（开）　NP(Theme)]]]

v 主要部が音形を持たないバージョンもある。(20)では、心理動詞が V1 に生じる（=21))。

(20)　a. 太郎 惊　醒　了.
Taro frighten-awake Asp
'Taro was frightened awake.'
b. 电话　铃声 惊　醒　了 太郎.
Telephone ring　frighten-awake Asp Taro
'The telephone ring frightened Tar awake.'

(21)　[$_{vP}$ NP(Agent) [$_{v'}$ v（ϕ）[$_{VP}$ V（惊醒）NP(Theme)]]]

3.2. 2 種類の軽動詞構文と逆行束縛

(22)　a. Gianni ha　fatto　riparare la　macchina **a** Mario.　(*faire* infinitive; FI)
Gianni has made repair　the car　to Mario
'Gianni got Mario to repair the car.'
b. Gianni ha　fatto　riparare la　macchina **da** Mario. (*faire par* type; FP)
Gianni has made repair　the car　by Mario
'Gianni got the car repaired by Mario.'

(23)　a. Nonpassivizable verbs are acceptable in FI but not in FP.
b. There is a sense of obligation on the part of the causee in FI but not in FP.
c. The causee may be omitted in FP but not in FI.　(Folli and Harley (2007: 201))

(24) 2 種類の軽動詞（Folli and Harley (2007: 210)):

Flavor of v	Specifier	Complement
v (DO)	Agent	Nominal or small clause
v (CAUSE)	Causer or Agent	Small clause

逆行束縛は、経験者を目的語にもつ心理動詞（EO 心理動詞)についてのものが有名だが(Belletti and Rizzi (1988))、心理動詞だけでなく、主語に「原因」項を取り述部が結果を表す複雑事象は、分析的使役構文であっても逆行束縛を許す。一方、同じ心理動詞であっても主語が経験者(Experiencer)であったり、同じ使役動詞であっても主語が行為者（Agent）である場合には、逆行束縛は許されない（Pesetsky (1995))。

(25) a. Pictures of himself$_i$ worry John$_i$.　(Belletti and Rizzi (1988: 317))
　b. Each other$_i$'s remarks made [John and Mary]$_i$ angry.　(Pesetsky (1995: 218))
　c.?Each other$_i$'s criticism **harmed** [John and Mary]$_i$.　(ibid.: 44)
(26) a.*Each other$_i$'s friends fear [John and Mary]$_i$.　(藤田・松本（2005: 140))
　b.*Each other$_i$'s relatives considered [John and Mary]$_i$ angry.　(Pesetsky (1995: 49))
　c.*Each other$_i$'s parents **harmed** [John and Mary]$_i$.　(ibid.: 44)

(27) a. worry1: {__, Experiencer, Target}, paired with v(DO).
　→ Experiencer moves to [Spec, v(DO)] to behave as Agent.
　b. worry2: {__, Experiencer, Target}, paired with v(CAUSE).
　→ Target moves to [Spec, v(CAUSE)] to behave as Causer. (cf. Takano (2011))

(28) a. [$_{vP}$ John$_i$　...　v(DO) [$_{VP}$ John$_i$ [$_{V'}$ worry [about pictures of himself$_i$]]]
　b.[$_{vP}$ [pictures of himself$_i$] v (CAUSE) [$_{VP}$ John$_i$ [$_{V'}$ worry [pictures of himself$_i$]]]
　→ himself は、移動前の位置で John に c 統御され、(58a,b)と同様、BT(A)を満たす。
(29) a. Which pictures of himself$_i$ do you think [that Bill$_i$ likes [e$_i$] best]?
　b. Replicants of themselves$_i$ seemed to the boys$_i$ [[e$_i$] to be ugly]
　(Belletti and Rizzi (1988: 314-315))
(30) a. [张三]$_i$打了[自己]$_i$ 一下.
　(張三が自分を殴った。)
　b. [自己]$_i$的闹钟**惊醒**了[张三]$_i$.
　(自分が設定したアラームが張三を驚かせて、その結果張三が目覚めた。)
(31) a. [$_{vP}$ 太郎$_i$　...　v(DO) [$_{VP}$ 太郎$_i$ [$_{V'}$ V(喝醉) [自己$_i$の酒]]] (= (3a))
　(Experiencer)　(Target)
　b.[$_{vP}$ [自己$_i$的酒] v (CAUSE) [$_{VP}$ 太郎$_i$ [$_{V'}$ V(喝醉) [自己$_i$的酒]]] (=(3b))
　(Causer)　(Experiencer)　(Target)

4. 「喝醉」構文のその他の諸特徴の説明

4.1. SVO 語順と順行束縛・逆行束縛[1]

(3) a. 太郎 喝醉　了 酒.
　b. 酒　喝醉　了 太郎.
(32) a. [$_{vP}$ [太郎$_i$] 喝+v (DO) [$_{AspP}$ V(醉) +Asp(了) [$_{VP}$ 太郎$_i$ [$_{V'}$ V(醉) 酒 J]]]]

[1] (1)の「追累」構文にある３通りの解釈も、以下のような構造的差異として説明できる。
(i)　太郎　追＋v(DO)　[$_{AspP}$ 累　了　[次郎 累]].　(= 1a))
(ii)　太郎　追＋v(DO)　[$_{AspP}$ 累　了　[太郎　累 次郎]].　(= (1b))
(iii)　太郎　v(CAUSE)　[$_{AspP}$ 追累　了　[次郎 追累 太郎]].　(= 1c))
(1d)の解釈は、いかなる構造からも派生されないので非文となる。

b. [$_{vP}$ [酒] v (CAUSE) [$_{AspP}$ V(喝醉) +Asp(了) [$_{VP}$ 太郎$_i$ [$_{V'}$ V(喝醉) 酒 J]]]]
(cf. Travis (2010) for AspP; Huang (2010) for V-raising in Chinese)

4.2.「把(BA)」構文への生起

(7) a.*太郎 把 酒 喝醉 了.
b. 酒 把 太郎 喝醉 了.
(33) [$_{vP}$ [酒] v (BA) [$_{AspP}$ 太郎 [$_{Asp'}$ V(喝醉) +Asp(了) [$_{VP}$ 酒 [$_{V'}$ V(喝醉) 太郎 J]]]]]
→ (7a)で BA 構文が許されないのは「酒」が Affected Object でないため。

4.3. 道具副詞・場所副詞との共起

(9) a. 太郎 {用碗 / 在院子里} 喝醉 了 酒.
b.*酒 {用碗 / 在院子里} 喝醉 了 太郎.

(9a)のみが道具副詞・場所副詞による修飾を許すのは、(9a)のみが軽動詞として v(DO)をもつため。v(CAUSE)は道具副詞・場所副詞と意味的に不整合なので修飾できない。

4.4. verb copying (doubling, reduplication)

(10) a. 太郎 喝 酒 喝醉 了.
b. *酒 喝 太郎 喝醉 了.

容認可能な(10a)と容認不可能な(10b)の違いは、行為者項主語文と使役項主語文の違いではない。verb copying は結果述部が主語を叙述するときに必要な方略。(Shi (2002: 37))

(34) a. 太郎 **打** 疼 了 次郎.
Taro hit ache Asp Jiro
'Taro hit Jiro and **Jiro** is suffering from pain.'
b. 太郎 **把** 次郎 **打** 疼 了.
Taro BA Jiro hit ache Asp
'Taro hit Jiro and **Jiro** is suffering from pain.'
c. 太郎$_i$ **打** 次郎$_j$ **打**疼 了 自己$_{i/*j}$ 的 手
Taro hit Jiro hit ache Asp himself DE hand
'Taro hit Jiro and **Taro's hand** is suffering from pain.'

4.5. 定名詞句制約と順行束縛の禁止

(3a)の「酒」は必ず不定の解釈、(3b)の「酒」は必ず定の解釈を受ける。(7a)は「这瓶酒」が定のため非文。(5a)の非文法性も、「自己的」という限定表現を伴う名詞句は定になるため。

(7) a.*太郎 喝醉 了 这瓶酒.
b. 这瓶酒 喝醉 了 太郎.
(5) a.*太郎$_i$ 喝醉 了 [自己]$_i$的 酒.

ただし、「喝醉」構文の目的語位置には、単に定名詞句が禁止されるだけでない。
(A) 形容詞付き名詞句や、数量を表す弱い決定詞（weak determiner）も不可。
(B) そもそも、この目的語が省略可。

(35) a. 太郎　喝　醉　了　{酒/*这瓶酒/*啤酒/*很多酒/*三杯酒}.
Taro drink drunk Asp sake/this bottle sake/beer/much sake/three cups of sake
b. 太郎　喝　醉　了.

(35a)の非文法性は、複合語「喝醉」の主要部が V2 の「醉」であって V1 の「喝」ではないことによる。つまり、(36a,b)と同じ理由（Nishiyama and Ogawa (2014)）。

(36) a. 太郎は、{この酒／ビール／３杯の酒／たくさんの酒}を飲んだ。
b. 太郎は、{酒／*この酒／*ビール／*３杯の酒／*たくさんの酒}に酔った。

6. 結語

本発表では、中国語の「喝醉」型複合動詞構文が示す、[A] 主語と目的語の入れ替えができる事実、[B] 逆行束縛が可能になる事実を含む 7 点の特徴について、統語論的説明を与えた。具体的には、[$_{vP}$ v [$_{AspP}$ Asp [$_{VP}$ Experiencer [V Theme]]]]という階層構造において、v が v(DO)である場合には Experiencer が、v(CAUSE)である場合には Theme が指定部に移動することにより派生されると主張することにより、一見、主語と目的語の自由な入れ替えができるように見える事実や逆行束縛の可能性だけでなく、経験者主語文と主題主語文の間に見られる 5 点の相違点も説明した。

引用文献：

Belletti, Adriana and Luigi Rizzi (1988) “Psych Verbs and θ -theory,” *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 291-352.

Folli, Raffaella and Heidi Harley (2007) “Causation, Obligation, and Argument Structure: On the Nature of Little *v*,” *Linguistic Inquiry* 38, 197-238.

藤田耕司・松本マスミ（2005）『語彙範疇（I）；動詞』研究社，東京.

Huang, C.-T. James (2010) “Resultatives and Unaccusatives: A Parametric View,” *Between Syntax and Semantics*, ed. by C.-T. James Huang, 377-453, Routledge, New York/London.

Li, Yafei (1990) “On V-V Compounds in Chinese,” *Natural Language and Linguistic Theory* 8, 177-207.

Li, Yafei (1995) “The Thematic Hierarchy and Causativity,” *Natural Language and Linguistic Theory* 13, 255-282.

Li, Yafei (1999) Cross-Componential Causativity,” *Natural Language and Linguistic Theory* 17, 445-497.

望月圭子(2004)「日本語と中国語における使役起動交替」『松田徳一郎教授追悼論文集』236-260, 研究社出版，東京.

Nishiyama, Kunio and Yoshiki Ogawa (2014) “Auxiliation, Atransitivity and Transitivity Harmony in Japanese V-V Compounds,” *Interdisciplinary Information Sciences* 20, 71-102.

Pesetsky, David (1995) *Zero Syntax: Experiencers and Cascade*, MIT Press, Cambridge, MA.

Shi, Yazhi (2002) *The Establishment of Modern Chinese Grammar: The Formation of the Resultative Construction and Its Effects,* John Benjamins, Amsterdam.

Simpson, Jane (1983) “Resultatives,” *Papers in Lexical-Functional Grammar*, ed. by Lori Levin, Malka Rappaport and Annie Zaenen, 143–157, Indiana University Linguistics Club, Bloomington.

Travis, Lisa (2010) *Inner Aspect: The Articulation of VP*, Springer, Dordrecht.

于一楽（2015）「中国語結果複合動詞の意味構造と項の具現化」，由本陽子・小野尚之『語彙意味論の新たな可能性を探って』，102-129，開拓社，東京.